

伊澤家三代の功績を考える



エスシー企画(株)
山本 秀樹
Yamamoto Hideki
技術士（建設部門）

はじめに

江戸時代の後期、徳島藩には傑出した土木技術者がいた。その名は伊澤亀三郎^{いさわかめさぶろう}という。独学で新田開発の技術（治水技術・干拓技術）を習得し、徳島藩士に取り立てられて普請裁判人（土木工事の現場責任者）や用水方（用水の管理者）を歴任した。その技術と熱意は養子速蔵から孫の文三郎へと引き継がれ明治時代まで続いた。彼らが創り上げた社会資本は幕末から明治における徳島の発展を支え、今日においてもその機能を発揮し続けている。ただ、近年の目覚ましい社会発展や時代変化等に伴い、改修や再開発等が進められた結果、姿を変えたり取り壊されてしまった施設が多くなっているのは残念である。

1 伊澤家の発祥

伊澤家は旧伊澤城主の直系である。伊澤城は現在の阿波市阿波町岡地にあった平城で(図一 3 参照)、平安時代末期の治承 3 年(1179 年)に伊澤四郎太夫家景が館を築いたとされる。館は南の段丘崖と東西の谷に挟まれた東西 160 m、南北 90 m の段丘上にあったが、現在は市営団地や畑になっている。伊澤神社(阿波市阿波町元町)は伊澤越前守が城の鬼門(東北の方角)守護神として奉祀したもので、八幡神社と呼ばれ歴代城主が奉られていたが、大正年間に当時の伊澤村内の神社 25 社を合祀して伊澤神社と改称している。伊澤神社近くの「蛭田池」は城の東側の水堀の名残であり、土手には城址の石碑が建てられている。西側の谷には伊澤城跡の案内板が設置されていて、イヤ谷と呼ばれる侵食谷を堰き止めた堀跡(鎌倉堀)が残っている。イヤ谷の中腹には伊澤の三泉と呼ばれる鍛冶屋泉、桜泉、鎌倉泉が清水を湧出している。なかでも鎌倉泉は見事な青石で築かれており、かつては城主の飲み水として、また、明治・大正時代には清酒の醸造に用いられていた。鎌倉殿(源頼朝)から拝領した土地のため、鎌倉を冠した名がついたとされる。南の段丘崖裾に並ぶ



写真一 伊澤城跡（竹林の奥）と外堀跡



写真二 三軒屋と伊澤城跡（南方より望む）

3 軒の民家は「三軒屋」と呼ばれ、かつて伊澤城の家老が居住していたと伝わる。

室町時代後半、阿波の守護職細川持隆は家臣三好義賢によって自刃させられたことから、細川家の嫡男真之は三好家の嫡男長治と対立していた。天正 4 年(1576 年)、細川真之は墮落した三好長治を見限り、勝瑞城を脱出して再興を図ろうとする。その際、伊澤越前守頼俊は一宮城主一宮成祐らと呼応して真之側についた。翌年 3 月、真之は荒田野（阿南市新野町）の戦いで長治を敗走させ、遂に長原（松茂町）において自刃させる。その直後、頼俊は勝瑞城に入って阿波を支配しようとするが、長治の家臣らが勝瑞城に迫ったため、頼俊はわずか 20 日で勝瑞城を捨て、板西城（板野町古城）に入城して対峙する。しかし、5 月に板西城は奇襲攻撃を受けて落城し、頼俊は誅殺（自害とも）されて伊澤城も落城してしまう。その後は伊澤綱俊が家督を継いだが、天正 10 年(1582 年)、長宗我部元親の阿波侵攻により再び伊澤城は落城し、遂に綱俊は所領を失った。続いて、豊臣秀吉の四国征伐によって蜂須賀家政が阿波を支配するようになると、阿波は土豪による一揆が多発した。その時、伊澤綱俊は一揆鎮圧に尽力したため、蜂須賀家によって組頭（与頭とも書く）庄屋に任ぜられた。以後、伊澤家は子孫が代々続いて現在に至っているという。組頭庄屋とは数箇所の庄屋を統括して、郡奉行や郡代と村を結ぶ要職であった。

2 伊澤亀三郎

伊澤亀三郎は宝暦 2 年(1752 年)に現在の阿波市阿波町伊沢で生まれた。実家は吉野川に架かる瀬詰大橋の北西に位置し、白壁の塀を巡らせ瓦葺きの立派な冠木門と白亜の土蔵が象徴的な旧家である。父の重五左衛門は組頭庄屋であり、次男として生まれた亀三郎は後に分家している。若い頃から父の仕事を手伝うかわら、水利の権威といわれた熊沢蕃山(1619 ～ 1691 年)の著書をひもとき、独学で土木技術を学んだ。蕃山は中江藤樹に陽明学を学び、備前国岡山藩主池田光政に招かれて藩政をつかさどった人である。土木の分野でも水利の権威として知られ、岡山城下を流れる旭川の氾濫に対し、山に樹木を植えて氾濫を抑制する治山・治水の思想を示すとともに、途中に洪水を流すための放水路を開削し、そこに乗越堤（越流堰）を築くことを提案した。現在の百間川がこの放水路であり、当時 3 箇所あった乗越堤も 2 箇所が現存している。このように蕃山の学問は現実的な実践を重んじるもので、これが亀三郎の幅広い行動力に大きな影響を与えたと思われる。



写真－3 伊澤亀三郎の生家

さて、徳島に入城した蜂須賀氏は産業の中心となる農業を発展させるため、農業用水路を開拓し堤防を築造する工事を始めた。徳島藩は「原土」という藩特有の在郷藩士を設けていた。原土とは、蜂須賀氏の前に阿波を治めていた細川氏や三好氏の家臣であった者が徳島藩に仕官しようとして果たせず、二代藩主忠英の慶安 3 年(1650 年)に吉野川流域などで荒れ地を賜り、田畑を開拓した半農半士のことである。有事の際には具足着用で騎馬にて招集に応じるが、平素は開墾地で農業に従事し、郡代の命令を受けて多くの土木普請

にも携わった。彼らは現場に技術者として派遣され、伝来の専門技術で監督に携わり、工事の仕様書や精算書の作成も行った。伊澤亀三郎はこの原士の土木技術者であった。

① 住吉新田の開発

亀三郎は新田開発において大きな功績を残している。徳島藩は石高を増やすため各地で新田開発を進めたが、最も大きいのが住吉新田（松茂町の徳島空港付近）であった。当時の干拓は、干潮時に干潟や陸地になり満潮時には浅い海になるような沿岸部で行われた。その方法は、まず石や土の堤防で干潟の先端を締切る。その際、堤防には排水用の水門を造っておく。干潮時を見計らってはその水門を開け、堤内地に溜まった水を排出する。そして、満潮時には水門を閉じて海水が堤防内に逆流しない様にする。また、堤内地の排水を効率的に行うため、干潟に多数の排水路を整備する。排水路を掘る際に出る大量の土砂は、低い土地を嵩上げする盛り土として活用する。堤内地の排水と低地の嵩上げ工事が完了すると、今度は近くの河川や用水路から堤内地の排水路に真水を引き入れる。土壌の中に染みこんでいる塩分を溶かして排水し、作物が生育できる土壌に改良するのである。このようにして江戸時代の人々は沿岸部や低湿地帯で新田開発をしていった。

さて、笹木野村（松茂町笹木野）は 17 世紀中頃に京都の豪商三島泉斎が旧吉野川と今切川の河口に堆積した砂地の干拓に着手したのが始まりである。しかし、事業は困難を極め、何人かの商人達に引き継がれ、最後は藩内外から土地を求めて移り住んだ入植者たちの努力によってようやく誕生した 144 h a の新田であった。当時の笹木野村は干拓により L 字型の地域が形成されていて、笹木野と長原浦の間は干潟の低湿地であった。

天明 3 年(1783 年)、亀三郎は板野郡宮島浦（現在の徳島市川内町）から長原浦（松茂町長原）にかけ、今切川左右岸に広がる広大な湿地約 400 h a の開発に乗り出した。開発にあたり大阪商人・袋屋作次郎から 500 両の資金援助を仰ぎ、それを藩に献上して許可を得た。工事は今切川をはさんで北側では長原浦と笹木野村の間の萱原を干拓するため、今切川の左岸に大きな堤防を作った。また、南側では宮島浦の北側に宮島新田（徳島市川内町宮島）を開く計画であった。ところが、完成したばかりの長原浦の堤防は翌年の洪水で跡形もなくなり、袋屋作次郎は事業から撤退した。



写真-4 住吉新田と笹木野村の位置



図-1 住吉新田の絵図

資金がなくなって困った亀三郎は、大阪商人^{こうのいけせいすけ}鴻池清助に援助を求めた。今度は笹木野村の東北端から南東端を結ぶ石積みの堤防を築き、間に広がる湿地を干拓するものであった（図－1 住吉新田の絵図を参照）。天明 7 年(1787 年)、笹木野の堤防は完成し、開かれた新田は「鴻池新田」と名付けられた。この名称はのちに鴻池家の祭神であった大坂の住吉大社の名前をとって「住吉新田」と改められた。現在、住吉新田は徳島あわおどり空港の敷地になっていて、地名は松茂町住吉住吉開拓である。伊澤亀三郎のこの業績をしのぶ「住吉新田石碑(明治 21 年建立)」は、昭和 2 年(1927 年)に吉野川河口右岸の徳島市金沢排水機場の西隣にある小さな森の神社境内に移転されている。一方、当初に干拓を予定していた宮島浦の開発は、袋屋作次郎による支援とは切り離して、亀三郎と百姓の協力により補修が行われ、「宮島新田」として開発に成功している。



写真－5 住吉新田の石碑

そして、亀三郎が干拓に失敗して笹木野と長原浦の間に残された萱原約 260 h a は、享和元年(1801 年)に宮島浦の庄屋坂東茂兵衛が資金を出して、約 7 ヶ月間の突貫工事で堤防を完成させている。堤防は杭木を二列に打ち連ね、捨石で固めたものであったが、毎年の洪水と波浪によって決壊したため、約 20 万本の松を植えて防潮・防風林とした。「松茂」の地名はこうした防潮・防風林に由来したものとされる。この干拓により天保 4 年(1833 年)頃には計画のうち 22 h a が田畑になったが、残りは水溜まりや萱原のままであった。その後、この「豊岡新田」の開発を成し遂げたのが坂東茂兵衛の孫である坂東黙之蒸、後の豊岡荔墩である。これにより荔墩は大庄屋となり、今切川の治水・利水に功績を挙げ、政治家としても活躍している。また、明治維新後には「^{ちゅうきゅうげん}疏鑿迂言」を著して知事に建白するなど、学者としても活躍した人物であった。

② 蓬庵堤の修築

初代藩主の蜂須賀家政が阿波に入った頃の鮎喰川は、眉山の麓を東に流れ田宮川に流入していたため、城下町は洪水のたびに氾濫していた。そこで天正 13 年(1585 年)、家政は鮎喰川を堤防で遮り、洪水を別宮川（現在の吉野川）まで流そうと築いたのが「蓬庵堤」であった。ちなみに、「蓬庵」とは、家政が慶応 5 年(1600 年)の関ヶ原の戦に先立ち、恩顧ある豊臣側と敵対する徳川側につくための方で出家し、高野山にこもった時の法名である。蓬庵堤のお陰で城下町は洪水を免れるようになったが、その一方で農民は深刻な水不足に陥った。日照りが続くと作物が枯れるといった惨状を見かねた島田村（徳島市南島田町、中島田町、北島田町）の庄屋楠藤吉左衛門は、百姓仕事の合間に水源地を求めて歩き回り、上鮎喰往還の南方堤の下に水が少し湧き出ているところを発見する。用水を掘る許可を郡奉行に願い出るが難色を示されたため、私財を投げ打って許可を取り付け水源地掘削を始める。元禄 5 年(1692 年)に掘削を始めてから 7 年もの歳月を経て、遂に水が噴き出した。これが「袋井用水」なのである。

また、藩は対岸の徳島市国府町側に対して、城下町を守るため高い堤防を築くことを許

さなかった。左岸側に堤防らしいものが造られたのは幕末の嘉永年間(1848～1854年)で、それも早淵村(国府町早淵)の庄屋後藤庄助をはじめ関係者の血のにじむような努力により築造された霞堤であった。鮎喰川の堤防が改修されて現在のような連続堤防になったのは近年になってである。

蓬庵堤の上流端は名東町3丁目の僧都の淵で、僧都のバス停付近から県道神山鮎喰線の東側にある徳島市営バスが通る道路を下流に向かい、名東保育所前や名東郵便局前を通過して北に進む。市バスの加茂名南小学校前停留所の北約100m地点からは、袋井用水水源池の西側の狭い市道を進んで国道192号を横断する。さらに楠藤翁頌徳之碑の前を北へ進み、鮎喰川堤防上に出てJR踏切を通過し、鮎喰川堤防上の道路を更に北へ進んで、不動橋付近に至る。高さは約4～5尺(1.2m～1.5m)程度であったが、総延長は約5,200mにおよぶ当時としては相当立派な堤防であった。現在、蓬庵堤はほとんどが道路となり沿道開発も進んで、上流区間を除いて当時の旧堤を偲ぶ面影は残っていない。



図－2 蓬庵堤の位置図



写真－6 現在の蓬庵堤(名東町3丁目)



写真－7 現在の蓬庵堤(名東町2丁目)

さて、天明年代は全国的に飢饉の多発で知られるが、阿波藩でも天明2～7年(1782～1787年)まで毎年のように洪水被害が発生し、被害額は10万石以上に及んで藩の財政は困窮していた。そのうえに寛政3年(1791年)の洪水で鮎喰川の堤防(蓬庵堤)が大破し、農民が苦しむのを見た亀三郎は、住吉村(藍住町)の組頭庄屋山田五郎左衛門とともに、民によるお手伝い普請で堤防を修築することを藩に進言する。両名は水害の少なかった阿波郡や板野郡内の有力者を訪ね、鮎喰川堤防の重要性と修築への協力を説いて回った。工事の費用は社倉(しやそう) (飢饉や災害など非常時に備え地域ごとに米を貯蔵しておく倉) の蔵穀を利用した。つまり社倉の米を借りて人夫の手当を支払い、借りた米は次の収穫時に利息を付けて返却するのである。これは会津藩主保科正之が考案した仕組みと云われる。亀三郎

は藩から普請裁判役を命ぜられると修築工事に着手し、翌年には工費が不足したため私財を投げうってこれを補い、寛政 4 年(1792 年)に完成させた。工事完成后、藩は両名に対し「奇特の事」と銀三枚づつ褒美を与えている。

その後も鮎喰川右岸堤防（蓬庵堤）は徳島の城下町を守るため、11 代藩主治昭、13 代藩主斎裕、14 代藩主茂韶という歴代藩主によって明治初年まで修築、延長工事が繰り返されてきた。名東町 3 丁目の僧都バス停横には明治 14 年(1881 年)に建てられた石碑がある。碑文には慶応 2 年(1866 年)寅の水によって鮎喰川が決壊して大きな被害を被り、翌年、13 代藩主斎裕の命によって僧都から島田まで「新堤」を築造したとある。これが鮎喰川新堤と呼ばれる現在の鮎喰川右岸堤防である。13 代藩主斎裕は将軍家（家斎の第 22 子）から蜂須賀家に養子に來た人で、幕府の陸軍総裁という要職について我国の兵制の洋式化にあたるなど評価されている人物である。そして、「旧堤」とは藩祖家政が築堤した蓬庵堤のことであり、14 代藩主茂韶が再び修築したとある。碑文からは徳島藩が城下町を守るため、いかに鮎喰川右岸堤防を重要視していたかが伺える。



写真－ 8 鮎喰川の新堤防と旧堤防（僧都）



写真－ 9 堤防修築の石碑（僧都）

③ 伊沢市堤の築造

その後の亀三郎の働きには目を見張るものがある。享和元年(1801 年)に用水方を命ぜられ、以後、用水路や堤防工事など藩営土木工事には必ず関わるようになる。生家の東には彼が築堤したといわれる「伊沢市堤」がある。伊沢市堤は大久保谷川左岸の下流を南に向かって長さ 48 間（約 86 m）、東に曲がって吉野川左岸を長さ 4 町 26 間（約 479 m）の総延長 5 町 14 間（約 565 m）であった。堤防の敷幅は 5 間～ 8 間（9 m～ 14.4 m）、高さは 1 間～ 2 間 3 尺（約 1.8 m～ 4.5 m）、馬踏（天端幅）



図－ 3 伊沢市堤防の位置図

は 1 間～ 3 間（1.8 m～ 5.4 m）と比較的小規模で、根固め工はなかった。下流端は内水や越水が貯留しないよう霞堤となっていて、洪水は氾濫するものの流速が無いため土地が削られることはなく、水が引いた後の堆積土は肥沃な土地を生み出したと考えられる。この堤防は天保 11 年(1841 年)の吉野川絵図や、幕末の儒学者庄野太郎が慶応元年(1865 年)に著した芳川水利論付録にもその存在が記されている。その後、伊沢市堤は明治末期から昭和初期にかけて実施された吉野川第一期改修工事で嵩上げが行われた。さらに、令和 3 年(2021 年)7 月に完成した勝命箇所の堤防工事によって、伊沢市堤は更なる拡幅・嵩上と下流の霞堤部分の締切りが行われた。これにより、明治 18 年(1885 年)に国による本格的な治水事業が始まって以来、136 年の時を経て、河口から岩津まで約 40 k mの堤防整備が完成したのである。現在、吉野川本川区間では当時の面影は見られないが、大久保谷川左岸下流の旧堤坊は昔の姿をとどめている。



写真- 10 伊沢市堤（大久保谷川左岸区間）



写真- 11 吉野川本川堤防（旧堤を拡幅・嵩上）

ところで、伊沢市堤が大久保谷川に沿って巻き付けられた地点には高地蔵がある。この高地蔵は徳島河川工事事務所（当時）が作成した「高地蔵探訪ガイドブック」には掲載されていない。高地蔵は洪水時にお地蔵さんを水没させないように台座が高く作られたと言われ、過去の氾濫水位を知る手がかりにもなる。伊沢市の高地蔵の台座の高さは、亀三郎が建設した伊沢市堤の天端高とほぼ同じ高さになっているのには驚かされる。



写真- 12 伊沢市堤防末端にある高地蔵

④ 露谷用水池の築造

享和 2 年(1802 年)に築造した麻植郡川田村（吉野川市山川町）の「露谷（津由谷）用水池」の築造も彼の功績のひとつである。山川町麦原は吉野川右岸に発達した河岸段丘で、その名が示すとおりほとんどが麦畑であった。緩やかな平坦地であるにもかかわらず標高が高いため、稲作や藍作に必要な水は池に頼るしかなく、池の数は 100 を超えていたとき

れる。その中でも露谷池は20町歩を養うことができる山川町最大の池であった。

山川町史には池本助左衛門の努力によって用水池が造られたとあるので、おそらく池本助左衛門が発起人で地元の世話役となり、伊澤亀三郎が工事を指揮・監督したのであろう。露谷用水池のあった場所は、現在の国道193号と県道248号（奥野井阿波山川停車場線）の交差点付近であり、津由谷（ほたる川の源流）を堰き止めて溜池を造り、そのかんがい水で山川町麦原・青木の段丘を水田に変えたのである。この工事において、たらいの水とロウソク灯を使って入れた水平線は、現在の技術でもってしても狂いのないくらい高水準だったといわれる。亀三郎は露谷用水池を築造した功績により郷高取（原土の上の身分）に進み、高十石が給せられている。その後、明治32年(1899年)に美郷村川俣（吉野川市美郷川俣）の川田川を水源とする川俣用水が完成し、にわかに100ヘクタール近い畑が水田へと変貌を遂げたのである。役割を終えた露谷池は、国道193号の敷地として埋め立てられ、その痕跡はどこを探しても見当たらない。露谷用水池のあった国道193号の脇には、昭和59年(1984年)に川俣用水の改築完了を記念して建立された石碑があり、それが露谷用水池の場所の目印となっているのみである。



写真－13 露谷用水池のあった付近

これ以外にも、阿波市阿波町において伊沢谷川の支川薬師谷川上流において、薬師谷池（上池と下池がある）の工事見積を行ったとの記録が残っている。阿波郡地方は降雨量が少なく扇状地地形のため水不足がひどく、各地で農民による水争いが数多く伝えられている。阿波町史には、亀三郎が築造した薬師谷池によって水田化された土地も水不足になっていること、水不足の際には他地区から用水の余り水を回してもらっているがこれ以上は余り水の配分を行えないため調査し善処願いたいとの上申書が記載されている。

⑤ 亀三郎の生き様

亀三郎は藩内各地を奔走し、地勢を調べ、水路を計り、堤防に、用水路にと阿波国中の大工事があるたびに参与し、監督に携わった。彼は、設計をはじめ関係地域住民の説得や現場の監督まで、工事に関する一切を引き受けて、少しも嫌がることなく、昼夜を問わず働き通した。亀三郎の手腕は藩に認められて信任は厚くなった。文政5年(1822年)、亀三郎は小奉行となり、知行に三人扶持・支配7石（一人扶持は一日玄米5合）を給されている。士分格になった亀三郎は住居を徳島に移したが、その3年後の文政8年(1825年)、



写真－14 伊澤亀三郎の墓（左は妻の墓）

病にかかり郷里伊沢村に帰ってその地で永眠している。享年 76 歳であった。亀三郎の墓は生家近くにある伊澤家の墓地にある。

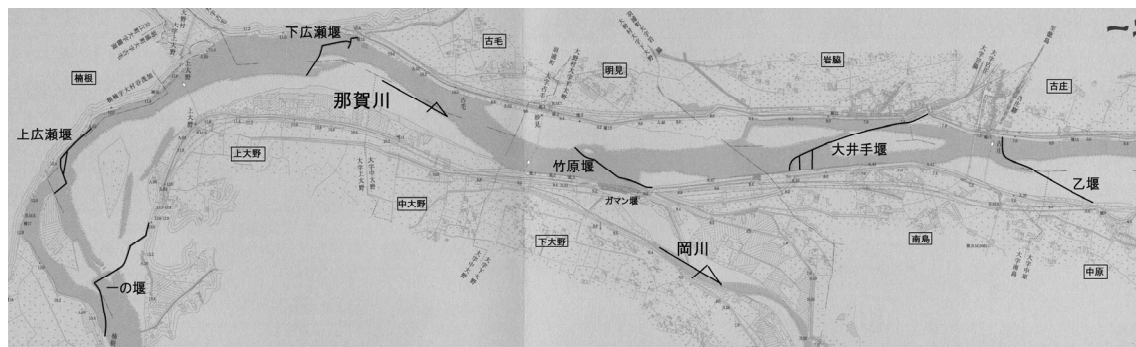
藩政時代において、庄屋とはいえ百姓の次男坊が家臣の末席に加えられるのは異例のことである。亀三郎の土木に関する技術、才覚、実行力、貢献度がいか程のものであったかが推し量られよう。徳島藩の勸農方にまで出世し、藩随一の土木技術者となった亀三郎の功績は、師と仰ぐ熊沢蕃山や土佐（高知）の野中兼山^{のなかけんざん}にも劣らぬほど高く評価されている。彼が登用された理由は、単に土木技術に卓越していただけでなく、手がけた治水と利水の両面にわたる計画が、常に藩の施策を先取りしていたからだと考える。そして、その技術と精神を子孫に伝え、発展させてきたことで徳島の社会資本整備の礎が築かれたと言っても過言ではないだろう。まさに、土木工事を行うために生まれ、そこに生きがいの全てを感じていた天性の土木技術者だったといえよう。

3 伊澤速蔵

亀三郎の後を継いだ養子の「速蔵頼重」は、文政 8 年(1825 年)に藩命によって関東に赴き、武蔵国（東京都、埼玉県、神奈川県の一部）の玉川上水、利根川沿川の水利工事などを視察している。帰藩後、速蔵は親ゆずりの技術に加え、先進地で得た新技術を活用し、那賀川の農業用取水堰の改築をはじめ、祖谷山間道工事、徳島市の末広新田の開発、吉野川市の大正池の築造等において成果を挙げている。速蔵は優れた功績により弘化 2 年(1845 年)、日帳格に昇進し、さらに嘉永 5 年(1852 年)には勸農方から大納戸奉行に登用され、城内出仕を命ぜられるまで栄進している。

① 大井手堰の改築

那賀川の農業用水堰のうち、「大井手堰」は羽ノ浦町岩脇と古庄の間から那賀川の北岸側に分派していた那東川を用水路として利用するため、那賀川の滞筋に沿って造られた堰であった。この大井手堰については地元に次のような言い伝えがある。延宝 2 年(1674 年)、羽ノ浦町中庄の豪農佐藤良左衛門（初代）は藩の命により堰口の修築工事に着手したが、工事は困難を極めた。遂に自分の娘を人柱に立てるしか手立てが無くなり、娘の身を横たえた棺が埋められようとした時、使者が駆けつけ藩主からの書状と身代わりの仏像が届けられた。人々は祈りを込めて 1,080 個の石に梵字を刻み、人柱の代わりの仏像とともに埋められた。工事は無事完成させることができ、取水口の真上には水神さん（現在の岩脇水神社）が建立されたというものである。



図－4 那賀川改修平面図（大正 12 年頃）

しかし、堰は松杭に玉石を詰めた原始的な構造のため、洪水のたびに壊れては直すという繰り返しが続いていた。速蔵は大井手堰の抜本的な改修工事において設計・施工監督に携わり、文政 8 年(1825 年)にこれを完成させている。



写真－15 大井手堰（昭和 30 年頃）



写真－16 大井手堰のウトウを通過する筏

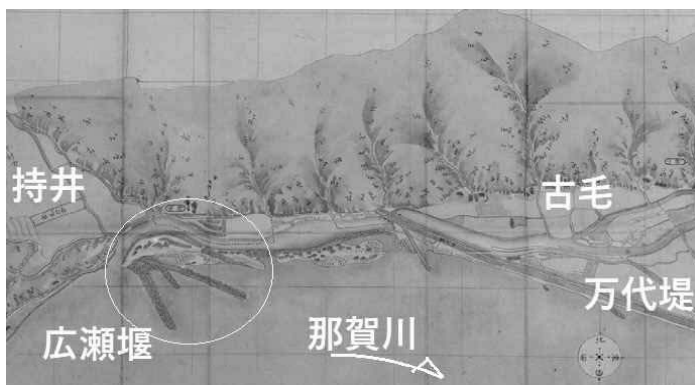
昭和 30 年(1955 年)、国営那賀川北岸農業水利事業により上流の古毛（阿南市羽ノ浦町古毛）地先に「北岸頭首工」が築造された。これにより、大井手堰は上流の上広瀬堰、下広瀬堰とともに撤去されたが、その際、取水口の真上に「大井手堰趾」が建立された。石碑には「大井手用水は阿波藩普請総裁判役伊澤亀三郎及びその子藩の用水方速蔵が、西紀 1825 年文政 8 年、玉川上水及び利根川の水利を研究後、目論見指図して川北全域の庄屋肝煎役達の協力により永久的大井手堰の完成を見たり」と刻まれている。碑文は那賀川の研究家で、大正 10 年(1921 年)に「那賀川沿革史」を著述した中西宇右衛門（中西長水と号した）の作成である。



写真－17 岩脇水神社と大井手堰趾（右）

② 上広瀬堰及び下広瀬堰の築造

那賀川の「広瀬堰」についても速蔵が関わっていたと考えられる。正保 2 年(1645 年)に築造された広瀬堰は洪水のたびに修築を繰り返したため、位置や形状も少しずつ変動していたらしい。文化 11 年(1814 年)作成の那賀郡古毛村絵図をみると、広瀬堰は現在の持井橋付近（阿南市羽ノ浦町萱原）にあった。その後、天保 7 年(1836 年)の洪水で堰は全壊し、那賀川の流れそのものが羽ノ浦町古毛視石



図－5 那賀川の広瀬堰絵図（加筆）

の山裾をえぐるような現在の流れに変化したため、元の位置での修復は不可能となった。このため、広瀬堰は上下2箇所に分離して再築されることとなり、楠根（阿南市楠根町金石）地先には「上広瀬堰」が、古毛（阿南市羽ノ浦町古毛）地先には「下広瀬堰」が、それぞれ新しく築造された。その際、経費やその後の修繕費等はすべて官費で賄われていたこと、藩政時代は勸農積方奉行が出張し藩直営で取水施設の運営・管理がなされていたことの記録がある。このため、広瀬堰の維持修繕をはじめ、上広瀬堰や下広瀬堰の築造、その後の修繕工事等において、速蔵ら伊澤家が計画や工事監督に携わっていたのは間違いないと思われる。



写真－18 下広瀬堰

③ 祖谷山間道工事

ここで速蔵が工事を行ったとされる「祖谷山間道」について考えてみたい。明治時代後半までの祖谷山地方は、三縄村（三好市池田町三縄）との境界付近で祖谷川と松尾川の両岸に迫る険しい断崖絶壁に阻まれて人馬の往来は完全に拒絶されていた。このため、吉野川右岸から標高 1,000 m 超の峠を徒歩（馬は通れない）で越えるのが唯一の経路で、白川郷（福井県）、椎葉（宮崎県）とともに日本三大秘境と呼ばれていた。大正 9 年(1920 年)、祖谷川沿いを白地から久保まで延長約 51 km、幅員 3m の祖谷街道が開通し、祖谷山地方は池田町（三好市池田町）と結びつくようになった。これにより、昭和 25 年(1950 年)、祖谷山は美馬郡から三好郡に編入され、西祖谷山村と東祖谷山村になった。



図－6 祖谷山地方への主要経路

では、祖谷街道ができるまでの交通経路はというと、文化 12 年(1815 年)に徳島藩が作成した「阿波志」には、「祖谷への経路凡そ五有り」として、①菅生を出て(小島峠から)貞光に出る、②(小祖谷から)長谷及び腕山を経て辻町に出る、③栗峰を経て松尾に出る、④榎の渡しを経て下名に出る、⑤有瀬を経て土佐に出る、の 5 ルートを挙げている。この他にも、落合峠から棧敷峠を経て三加茂に出る経路や、見越峠を経由して木屋平に出る経路等があった。これらのうち、小島峠は菅生のため、見越峠は名頃のため、落合峠から棧敷峠は落合のための経路であり、榎や有瀬は土佐への経路であった。一方、辻町や井内谷村(三好市井川町)から小祖谷を経由して祖谷山へ入る経路は、まず荒倉を経て腕山越えるか、または桜から日ノ丸山越えて小祖谷に入る。この経路は明治 30 年(1897 年)頃に、水ノ口峠を越えるルートも開通している。小祖谷から先については、四つ方峠を経て小島、高野方面や田ノ内、一字方面に至るルートと、寒峰の尾根伝いに大枝、京上方面に至るルートに分かれていた。当時、東祖谷山の中心は大枝であり、蜂須賀氏より祖谷山の名主・土豪のとりまとめを任せられ、実質的な支配者であった喜多氏の屋敷も大枝にあった。また、天正 13 年(1585 年)と元和 6 年(1620 年)に起きた祖谷山一揆の本拠地は西祖谷山の田ノ内であった。このため、小祖谷を経由するルートは明治末期まで祖谷山の中心部との間で多くの物資が人力で搬出入されていた。

しかしながら、祖谷山地方は前述の祖谷山一揆以降も名主らの根強い抵抗が続き、徳島藩が唯一「検地」を行えなかった地域であった。したがって、藩には祖谷山の利便性向上のために間道を整備する考えはなかったと思われる。では、なぜ間道工事を行ったのか。理由は藩主による祖谷山視察が行われたからと考える。文政 11 年(1828 年)9 月、12 代藩主斉昌が祖谷山の視察を行っているので、それに先立ち速蔵が視察経路の工事を行ったのではなかろうか。残念ながら祖谷山への経路に関する資料が少なく、速蔵が行った工事箇所を特定することはできなかったが、これらの経路のいずれかであったことは間違いないと思われる。

④ 末広新田の開発

「末広新田」は現在の徳島市末広 1～5 丁目及び南末広町であり、天保 10 年(1839 年)に名東郡矢野村の藍商人森晋平の出資により開発され、当初は「角大新田」と呼ばれていた。この新田開発の見積や指揮・監督を行ったのが速蔵である。末広新田は沖洲浦の西方で、新町川と沖洲川の合流点北西に位置し、北は安宅、西は大和町に接する。南の新町川や東の沖洲川沿いに土手を築いて、福島、安宅に近い部分は水田とし、海に近く米作に不適な南沖洲など低地帯は塩田にするという二つの目的で 14 h a の開発が行われた。江戸時代中頃の絵図類には末広新田の名称がみえないことから、当時は萱原だったと思われるが、文久 3 年(1863 年)の徳島城下町絵図には末広新田が描かれていて、今日ではほぼ全域が市街地となるまでに発展している。



図ー 7 末広新田の絵図(加筆)

⑤ 大正池の築造

吉野川市川島町桑村にある「大正池」も速蔵が築いたのが始まりとされる。嘉永 4 年(1851 年)に藩の勸農奉行であった速蔵は、かんがい用の池を湯吸山麓に造った。この池は、大正 4 年(1915 年)に規模が拡大されたことから大正池と呼ばれるようになった。現在は川島東土地改良区がかんがい用水の水源として管理しており、貯水量 175 千 m³ は農業用ため池として県内最大である。大正池とその周辺は平成元年度に川島町（現在の吉野川市）により上桜公園として整備され、園内の栈橋、遊具、広場などは市民の憩いの場となっている。



写真－ 19 大正池と上桜公園

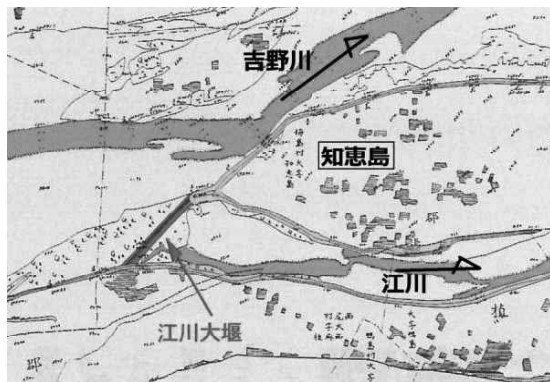
4 伊澤文三郎

亀三郎の孫である「文三郎（文作ともいう）」も祖父伝来の業を継ぎ、勸農方から堤防取締役となった。明治維新後は名東県（現在の徳島県）の役人となって県下各町村を巡回し、治水工事に貢献している。吉野川においては、川島町城山から下流の石井町藍畑に至る吉野川南岸堤防の工事に従事したと言われており、麻植郡鴨島町（吉野川市鴨島町）にあった「江川大堰」の改築にも関わっている。那賀川においても大野村大字下大野（阿南市下大野町）にあった「竹原堰（八貫堰）」がその遺業といわれる。

① 江川大堰の改築

明治時代まで吉野川の支流江川は、知恵島村（吉野川市知恵島）で吉野川から分流する派川のひとつであった。平時は吉野川本川からの直接流入はないものの、出水時には洪水が流入し、吉野川のもう一つの流れと言っていいほど強い流れだったらしい。このため、吉野川と江川に挟まれた知恵島村をはじめとする江川沿いの村々は、吉野川から運ばれる肥沃な土砂により藍作の恵みを受けるものの、洪水常襲地帯として中洲、または遊水池のような環境に置かれていた。江川への分派点に「江川大堰」が築かれた年代は不詳だが、天保 11 年(1840 年)作成の吉野川絵図（徳島県立図書館）には江川分岐点に堰が描かれている。当時の堰は周辺の 13ヶ村が協同して築いたため「十三ヶ村堰」と呼ばれていた。この堰を改築するにあたり計画や指導にあたったのが文三郎であるが、その際、藩が工事にどう関わっていたのかは不明である。江川大堰は堰の高さまでの洪水は吉野川本流へ流し、洪水位が堰の高さを超えると洪水の一部を江川に分流させる役割を有する越流堰で、南岸地域の水害を軽減することを目的としていた。明治 17 年(1884 年)、吉野川の本格的改修を行うためオランダ人技士ヨハネス・デ・レーケが現地調査を行った際、江川大堰を見て「江川のように派川の流入口に堰を設けても高さは低く洪水時の河積もあり問題ない。また、江川堰はその築造法も優れたものである。」との記録を残している。明治 34 年(1901 年)作成の吉野川実測平面図を見ると、知恵島の堤防からは剣先と呼ばれる突堤の様な 30 ～ 40 m 程の小堤が先端を上流に向けて張り出し、江川への分派地点には第十堰のような

堰が描かれている。堰の構造は青石で築かれた二段堰で、高さは高水敷程度、長さは約 400 m程であった。



図－ 8 明治 34 年吉野川平面図（江川大堰）



写真－ 20 江川大堰のあった箇所の堤防

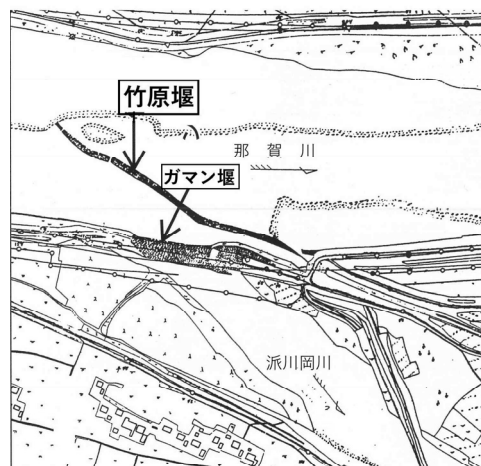
その後、明治 8 年(1875 年)に吉野川右岸の川島町城山（岩の鼻）から石井町藍畑の中須にかけて約 15km の連続堤防が完成している。この工事も文三郎が建設に関わったとされるが、この堤防は吉野川本川に沿ったものではなく、江川の南岸に沿ったものであった。このため、江川から南の地域は洪水から守られるようになったが、知恵島村などは洪水のたびに浸水の危険にさらされていた。昭和 2 年(1927 年)に完成した吉野川第一期改修工事により江川大堰は連続堤防となり、ようやく鴨島町（吉野川市）全域が洪水から守られるようになった。現在、江川大堰の名残りは見当たらないが、堰のあった場所は「江川の湧水」がある付近の吉野川堤防が、堤内側に幅広く盛り土されている区間である。

② 竹原堰の改築

那賀川の「竹原堰」は延宝 2 年(1674 年)に那賀川南岸側へのかんがいを目的に、北岸側の大井手堰と相対する形で築造された堰（位置は図－ 4 参照）である。取水口は派川岡川の左岸堤防上流端が那賀川堤防と接する地点に設けられていた。派川岡川も吉野川の派川江川と同様、明治 2 年(1869 年)、分派地点に越流堰が設けられ「ガマン堰」と呼ばれていた。洪水時には那賀川の洪水の 1 / 3 が岡川に流入し、たびたび家や田畑が流され堰



写真－ 21 ガマン堰があった箇所の堤防



図－ 9 大正 12 年頃の竹原堰（八貫堰）

も壊れたため、人々は「ガマン、ガマン」と慰め励まし合って復旧したことからそう呼ばれるようになったとされる。この堰も昭和 18 年(1943 年)に那賀川改修工事によって堤防で締め切られて連続堤防となった。昭和 29 年(1954 年)、「県営那賀川南岸用水改良工事」により上流の久留米田(阿南市上大野町久留米田)地先に「南岸堰」が築造され、竹原堰は一の堰、乙堰とともに撤去されている。

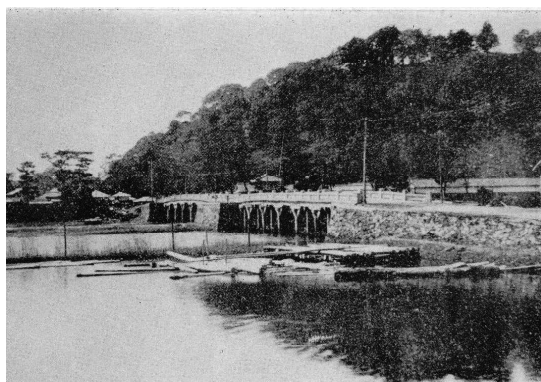
③ 助任橋(二代目)の建設

文三郎は徳島市の徳島三丁目と助任橋一丁目を結ぶ「助任橋」の工事も担当している。助任橋は徳島城の北側を流れる助任川に架かる橋で、徳島城公園の北東角に位置する。初代の助任橋は蜂須賀家政が徳島城築城の折に架けられたとされ、慶長 2 年(1597 年)朝鮮出兵時の書状の中に「北口長橋」ができたとの記録がある。場所は現在の助任橋より 100 mほど下流で、長さ 76 間半(137.7 m)、幅 4 間 4 尺(8.4m)の長大な太鼓橋だった。侍屋敷のあった常三島と徳島城を結ぶ重要な橋のため、橋の南詰には門台、番所、会所が設置され、警備も厳重に行われていた。初代の橋は享保 15 年(1730 年)の大風雨により大破したため架け換えられ、2 年後に完成した橋は欄干に擬宝珠が付けられるなど優美な造りだったという。この橋は延長約 146 mで、江戸時代中期における橋の番付では全国で第 10 位だった。



図－10 初代助任橋の絵図(加筆)

2 代目となる助任橋は、現在の橋がある位置に石橋で架け換えられ、明治 7 年(1874 年)10 月に完成した。この橋の工事を担当したのが文三郎である。長さは 50 間(90 m)、事業費は 46 百円で、当時は全国で最も長い石橋だったらしい。文三郎はこの工事において「自費で職人や人夫に酒を与え、よく使役の道を尽くした。」として、明治 8 年(1875 年)に県から木盃を授与されている。



写真－22 2 代目助任橋(文三郎担当の石橋)



写真－23 3 代目助任橋(現在工事中)

この石橋も昭和 14 年(1939 年)には鉄筋コンクリート橋に架け替えられた。昭和 42 年(1966 年)には交通量の増加に伴い上流側へ拡幅工事が行われ、長さ 39.3 m、幅員 18.0 m

の橋となった。逆に広がった助任川は貯木場部分が埋め立てられるなどにより半分ほどの川幅となり、護岸も青石が張られてはいるものの、助任橋が石橋だった当時の遺構はどこにも残っていない。そして、3代目となる現在の橋も老朽化が進み、耐震性も不足していることから、令和6年(2024年)5月より通行止となって架替工事が行われている。4代目の助任橋は令和10年(2028年)の完成が見込まれている。

おわりに

亀三郎の業績は主に阿波北方であったが、速蔵の活動範囲は那賀郡や海部郡にまで及んだ。さらに文三郎は県内の公共土木工事に多大な功績を残した。幕末から明治の時代における徳島藩内の主要な用水路や堤防などの土木工事で、伊澤家三代の手にならないものはないとさえ言われる。今日、我々が何気なく見ている吉野川や那賀川など各地に伊澤家三代の業績が数多く残されていることに驚きを禁じ得ない。現在のような測量機材はもとより応力計算や構造物の安定性に対する検討方法もなく、資材や重機など施工能力も限られていた時代において、経験だけで現場を適切に見極め、施設を構築する驚異の能力と、私財を投げ打ってまで工事を完遂させる強い信念には頭が下がる思いである。最近の若手土木技術者は、こういった古来の積み上げ方式で構築された現場をあまり知らない。そのためか、災害時における対応能力の欠如が懸念されるところである。その意味からも、伊澤亀三郎は徳島県内で活躍中の土木技術者の方々にぜひ認識してもらいたいパイオニアであると考えます。そして、徳島の将来をも見据えた超人的な活躍により、吉野川や那賀川の治水・利水事業をはじめ農業基盤の整備に尽力した伊澤家三代の功績と偉大さを讃えずにはいられないのである。

参考文献

- 四国開発の先覚者とその偉業 渡辺茂雄 昭和39年～42年四国電力(株)
四国三郎物語 建設省徳島工事事務所
那賀川歴史文化紀行ガイドブック 国土交通省那賀川河川事務所
那賀川北岸用水の歴史と水利用 那賀川北岸土地改良区 山本秀樹
Our よしのがわ 吉野川歴史探訪 国土交通省徳島河川国道事務所
JCCA しこく Vol.05 吉野川普請を担った土木技術者 松尾裕治
松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館HP
山川町史(S62.8.20) 山川町史編集委員会 改訂山川町史刊行会発行
阿波町史(S54.11.3) 阿波町史編集委員会 阿波郡阿波町発行
東祖谷山村に於ける交通の變遷 福井好行
阿波学会研究紀要 郷土研究発表会紀要第18号 中祖谷の盛衰過程 河野幸夫
徳島から探求する日本の歴史 地方史研究協議会発行(16徳島藩の吉野川治水事業)
とくしま歴史散歩 徳島史学会編集 発行者湯浅良幸
阿波の歴史小説〈43〉阿波の川ものがたり 阿波の歴史を小説にする会発行
徳島大学附属図書館HP 高精細デジタルアーカイブ(徳島城下町、那賀郡古毛村絵図)
徳島城歴史博物館HP 城下町とくしま歴史さんぽ
徳島県立図書館HP デジタルライブラリー 所蔵絵図(吉野川絵図)
国立公文書館HP デジタルアーカイブ(阿波国徳島城之図)